

鳥帽子折

宮増作

前

ワキ 三条の吉次

ワキヅレ 弟吉六

子方 牛若丸

シテ 鳥帽子折

ツレ 同人妻

後

ツレ (数人) 手下ども

シテ 熊坂長範

季は 地は
雑 前は近江
後は美濃

「末も東の旅衣。く。日も遙々と急ぐらん。

「是は三条の吉次信高にて候。我此程数の宝を集め。

弟にて候ふ吉六を伴なひ。唯今東へ下り候。如何

に吉六。高荷どもを集め東へ下らうするにて候。

吉六 「委細心得申し候。やがて御立ち有らうするにて候。

牛若詞 「なふくあれなる旅人。奥へ御下り候はゞ御供申し候はん。

ワキ詞 「やすき間の御事にて候へども。御姿を見申せば。

師匠の手を離れ給ひたる人と見え申して候ふ程に。思ひも寄らぬ事にて候。

牛若 「いや我には父もなく母もなし。師匠の勘当蒙りたれば。唯伴なひて行き給へ。

ワキ 「此上は辞退申すに及ばずして。此御笠を参らすれば。

牛若 「牛若此笠おつ取つて。今日ぞ始めて憂き旅に。

下歌地 「栗田口松坂や。四の宮河原逢坂の。関路の駒の跡

に立ちて。いつしか商人の。主従となるぞ悲しき。

上歌

「藁屋の床の古へ。／＼。都の外の憂き住居。さこ

そはと今。思ひ粟津の原を打ち過ぎて。駒もとゞ

ろと踏み鳴らし。勢田の長橋打ち渡り。野路の夕

露守山の。下葉色照る日の影も。傾くに向ふ夕月

夜。鏡の宿に着きにけり。／＼。

ワキ詞
「急ぎ候ふ程に。鏡の宿に着きて候。此所に御休み
あらうずるにて候。

牛若詞
「唯今の早打をよく／＼聞き候へば。我等が身の上

にて候。此儘にては叶ふまじ。急ぎ髪を切り烏帽子を着。東男に身をやつして下らばやと思ひ候。

牛若
「如何に此内へ案内申し候。

シテ詞
「誰にて渡り候ぞ。

牛若
「烏帽子の所望に参りて候。

シテ
「何と烏帽子の御所望と候ふや。夜中の事にて候ふ程に。明日折りて参らせうずるにて候。

牛若
「急ぎの旅にて候ふ程に。今宵折りて賜はり候へ。

シテ
「さらば折りて参らせうずるにて候。先づ此方へ御

入り候へ。さて鳥帽子は何番に折り候ふべき。

牛若
「三番の左折に折りて賜はり候へ。

シテ
「是は仰せにて候へども。それは源家の時にこそ。

今は平家一統の世にて候ふ程に。左折は思ひもよ
らぬ事にて候。

牛若
「仰せは尤もにて候へども。思ふ子細の候ふ間。唯

折りて賜り候へ。

シテ
「幼き人の御事にて候ふ程に。折りて参らせうずる
にて候。此左折の鳥帽子に付いて。嘉例目出度き
物語の候ふ語つて聞かせ申さうずるにて候。

牛若
「さらば御物語り候へ。

シテ
「さても某が先祖にて候ふ者は。もとは三条烏丸に
候ひしよな。いで其頃は八幡太郎義家。安部の貞
任宗任を御追罰あつて。程なく都に御上落あり。

某が先祖にて候ふ者に。此左折の烏帽子を折らせられ。君に御出仕有りし時。帝なのに思し召され。其時の御恩賞に。奥陸奥の国を賜つて候。我等もまた其如く。嘉例目出度き烏帽子折にて候へば。此烏帽子を召されて程なく御代に。

「出羽の国の守か。陸奥の国の守にか。ならせ給はん御果報有つて。世に出で給はん時。祝言申しき烏帽子折と。召されて目出度う。引出物たばせ給

へや。あはれ何事も。昔なりけり御烏帽子の。左折の其盛。源平両家の繁昌。花ならば梅と桜木。四季ならば春秋。月雪の詠め何れぞと。争そひしにやいつの間に。保元の其以後は。平家一統の。代となりぬるぞ悲しき。よしそれとても報いあらば。世かはり時來り。折知る烏帽子桜の花。咲かん頃を待ち給へ。

シテ
「かやうに祝ひつゝ。

地

「程なく烏帽子折り立てゝ。花やかに三色組の。烏帽子懸緒取り出だし。気高く結ひ済まし。召されて御覧候へとて。御髪の上に打ち置き。立ち退きて見れば。天晴御器量や。是ぞ弓矢の大将と。申すとも不足よもあらじ。

シテ詞
「日本一烏帽子が似合ひ申して候。

牛若
「さらば此刀を参らせうするにて候。

シテ
「いや／＼烏帽子の代りは定まりて候ふ程に。思ひ

もよらず候。

牛若
「唯御取り候へ。

シテ
「さらば賜はらうするにて候。さこそ妻にて候ふもの悦び候はん。如何に渡り候ふか。

ツレ
「何事にて候ふぞ。

シテ
「幼き人の烏帽子の御所望と仰せ候ふ程に。折りて参らせ候へば。此刀を賜はりて候ふ。なんぼう見事なる代りにてはなきか。よく／＼見候へ。あら

不思議や。かやうの事をば天の与ふる事とは思ひ
給はで。さめぐと落涙は何事にて候ふぞ。

ツレ「恥かしや申さんとすれば言の葉より。先づ先だつ

は涙なり。今は何をか包むべき。是は野間の内海
にて果て給ひし。鎌田兵衛正清の妹なり。常盤腹
には三男。牛若子生れさせ給ひし時。頭の殿より
此御腰の物を。御守刀にて参らせ給ひし。其
御使をば。わらは申してさぶらふなり。痛はしや
物を。あらあさましや候。

世が世にてましまさば。かく憂き日をば見まじき
物を。あらあさましや候。

シテ詞
「何と鎌田兵衛正清の妹と仰せ候ふか。

ツレ「さん候。

シテ
「言語道断。此年月添ひ参らすれども。今ならでは
承らず候。さて此御腰の物をしかと見知り申され
て候ふか。

ツレ「こんねんだうと申す御腰の物にて候。

「實にく承り及びたる御腰の物にて候。さては鞍馬の寺に御座候ひし。牛若殿にて御座候ふな。さあらば追つ付き。此御腰の物を参らせ候ふべし。おことも渡り候へ。や。いまだ是に御座候ふよ。是に女の候ふが。此御腰の物を見知りたる由申し候ふ程に。召し上げられて賜はり候へ。

牛若「不思議やな行くへも知らぬ田舎人の。我に情の深きぞや。

二人「人違へならば御免しあれ。鞍馬の少人牛若君と。見奉りて候ふなり。

牛若「實に今思ひ出だしたり。若し正清がゆかりの者か。

ツレ「御目の程の賢さよ。わらはゝ鎌田が妹に。

牛若「あこやの前か。

ツレ「さん候。

牛若「實に知るは理我こそは。

地「身のなる果の牛若丸。人がひもなき今の身を。

語

れば主従と。知らるゝ事ぞ不思議なる。

「はや東雲も明け行けば。く。月も名残の影うつる。鏡の宿を立ち出づる。

二人 「痛はしの御事や。さしも名高き御身の。商人と伴ひて。旅を飾磨の徒步はだし。目もあてられぬ御風情。

牛若 「時代に変はる習ひとて。世の為め身をば捨衣。恨みと更に思はじ。

シテ 「東路の御はなむけと。思し召され候へとて。

地 「此御腰の物を。強ひて参らせ上げゝれば。力なしとて請け取り。我若しも世に出づならば。思ひ知るべしさらばとて。商人と伴ひ憂き旅に。やつれはてたる美濃の国。赤坂の宿に着きにけり。く。

（中入）

「急ぎ候ふ程に。赤坂の宿に着きて候。如何に吉六。此所に宿を取り候へ。

吉六 詞
「畏つて候。」

ワキ 「是は何と仕り候ふべき。」

吉六 「我等も是非を弁へず候。」

牛若 詞
「面々は何事を仰せ候ふぞ。」

ワキ 「さん候我等此所に泊り候ふを。此あたりの悪党ども聞き付け。今夜夜討に討たうする由申し候ふ程に。左様の談合仕り候。」

牛若 「縦ひ大勢ありとも。表にたゝん兵を。五十騎ば

かり切り伏すならば。やはか引かぬ事は候ふまじ。」

ワキ 「是は頼もしき事を仰せ候ふ物かな。悉皆頼み候。」

牛若 「面々は物の具して待ち給へ。我は追手に向ふべしと。」

地 「夕べも過ぎて鞍馬山。く。年月習ひし兵法の。」

術を今こそは。顕はし衣の妻戸を。開きて沖つ白波の。打ち入るを遅しと待ち居たり。く。」

ツレ一 声 「寄せかけて。打つ白波の音高く。鬨を作つて騒ぎ

シテ詞
「如何に若者ども。
けり。

ツレ詞
「御前に候。

シテ
「追手がくわつと開けたるは。内の風ばし早いか。

ツレ
「さん候内の風早くして。或は討たれ。又は重手負ひたると申し候。

シテ
「不思議やな内には吉次兄弟ならでは有るまじきが。さて何者かある。

ツレ
「投松明の影より見候へば。年の程十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて切つて廻り候ふは。さながら蝶鳥の如くなる由申し候。

シテ
「さて摺針太郎兄弟は。

ツレ
「是は火振の親方として。一番に切つて入りしを。例の小男渡り合ひ。兄弟の者の細首を。唯一打に打ち落したる由申し候。

シテ
「えい／＼何とく。彼者兄弟は。余の者五十騎百

騎には増さうするものを。あゝ切つたりく彼奴
は曲者よ。

ツレ「高瀬の四郎は之を見て。今夜の夜討悪しかりなん
とや思ひけん。手勢七十騎にて引いて帰りて候。

シテ「きやつは今に始めぬ臆病者。さて松明の占手は如
何に。

ツレ「一の松明は切つて落し。二の松明は踏み消し。三
は取つて投げ帰して候ふが。三つが三つながら消
えて候。

シテ「それこそ大事よ。夫れ松明の占手といつば。一の
松明は軍神。二の松明は時の運。三は我等が命な
るに。三つが三つながら消ゆるならば。今夜の夜
討はさてよな。

ツレ「御詫の如く。此まゝにては鬼神にてもたまるまじ
く候。唯引いて御帰り候へ。

シテ「実にく盜も命の有りてこそ。いざ引いて帰らう。

ツレ
「尤にて候。

シテ
「いや熊坂の長範が。今夜の夜討を仕損じて。何く
に面を向くべきぞ。唯攻め入れや若者どもと。大
音あげて呼ばゝりけり。

地
「闇を作つて切つて入りけり。

地
「あら物々しやおのれ等よ。く。先に手並は知り
つらん。それにも懲りず打ち入るか。八幡も御知
見あれ。一人も助けてやらじ物をと。小口に立つ
てぞ待ちかけたる。

地
「熊坂の長範六十三。く。今宵最後の夜討せんと。

鉄屐を踏ん脱ぎ捨て。五尺三寸の大太刀を。す
るりと抜いて打ちかたげ。をうどり歩みにゆらり
くと。歩み出でたる有様は。如何なる天魔鬼
神も。面を向くべき様ぞなき。

地
「あらはかぐしや盗人よ。く。めだれ顔なる夜
討はするとも。我には叶はじ物をとて。透間あら

せず切つてかかる。熊坂も大太刀使の曲者なれば。
さそくをつかつて十方切。八方払や腰車。破壊の
返し風まくり。剣降らしや獅子の歯がみ。紅葉重
花重。三つ頭より火を出だして。しのぎを削つて
戦ひしが。秘術を尽す大太刀も。御曹司の小太刀
に切り立てられ。請太刀になつてぞ見えたりける。
地「打物業にて叶ふまじ。く。組んで力の勝負せん
とて。太刀投げ捨てゝ。大手を広げて飛んでかゝ
るを。背けて諸膝薙ぎ給へば。切られてかつぱと
転びけるが。起き上らんとてつゝ立つ所を。真向
よりも割りつけられて。一人と見えつる熊坂の長
範も。二つに為つてぞ失せにける。